

保育者養成における絵本の活用方法について

— 図画工作の授業実践を通して —

佐藤 智朗

(山口芸術短期大学 保育学科)

1. はじめに

在籍する学生は、ビデオやテレビゲームが家庭に普及し始めた頃に生まれている。イメージーションを膨らませる必要がある絵本は、幼稚園や保育園で読んでもらう、特別なものになってきた頃でもある。

図画工作（基礎技能）の時間の始めに、絵本を読むようになり、15年ほどになる。当初は、「さつちゃんのみほうのて」「チロヌップのきつね」を読むと必ず涙を浮かべる学生がいた。また、「おいしいのぼうけん」「ロボットカミイ」を最後まで聞いてくれた。しかし、ここ数年は、途中であくびをしたり、友達と話を始める学生が目立つようになってきた。

なぜ、絵本の世界に、のめり込むことができないのか。それは、単純に楽しくないからである。絵本ではなく映像で育った学生は、絵が勝手に動き音楽に併せてズームアップもしてくれるのが当たり前で、動き出さない絵本にのめり込むことができないのは仕方のないことと言える。また、絵の少ないお話では、場面を想像することすらできないためである。

2. 目的

絵本を保育者養成の中で積極的に取り入れることで、学生の学習意欲を引き出し、保育力量を高めることを目的とする。また、カリキュラムや教授方法を新たな視点から再構築することを目的とする。

本稿では、図画工作の授業において、絵本を導入や題材・教材として活かすことで、学生の学習意欲を引き出し、授業効果を高めることができることを、実践を通して明らかにすると共に、効果や課題を基に今後の在り方を考察する。

3. 方法

学生が、関心や意欲を持って図画工作の授業に取り組めるような絵本の活用方法を考え、平成13・14年度入学生を対象に、1年前期の授業で実践し、その効果や課題をまとめた（平成14年度全国保育士養成協議会研究大会において発表）。

それを基に、平成15年度入学生を対象に、1年前期・後期の図画工作の授業で実践を行なう。また、比較のために、チューター（1年前期・後期）や言葉の指導法（1年後期）においても、絵本を使った実践を行なう。

4. 実践からの考察

集中力のなさや意欲の減退を、学生の資質が低下したためと決め付け、学生の側の責任にしていたが、絵本を授業に関連を持たせたカリキュラムを立て、教授方法も抜本的に見直したことで、授業者の側の責任でもあり、授業の在り方次第で、改善できることが分かった。特に、造形素材や道具、技法を中心としたハード面からの授業研究から、導入や意欲付けといった指導（学生自らが学び取るような活動を引き起こし、促進し、発展させること）を中心としたソフト面からの授業研究にウエイトが移行した効果は大きい。（詳しい内容は、当日掲示する）

しかし、実践を進める中で、新たな課題も明らかになってきた。絵本を読んでも内容を読み取れない、あるいは楽しめない学生がいるということである。絵本を学生が見て（聞いて）くれなければ、絵本を使用する意味が無くなってしまう。絵本に対する興味や関心を持たせる工夫（絵本の選び方や読み方など）が必要である。

また、図画工作以外で絵本を読んだ時には、学生が食い入るようにこちらを見て、楽しんでいるのに、図画工作の授業では、必死にメモを取り、顔が下を向いていることが多いことが分かった。

以下、授業実践を通して分かった、絵本活用の効果、問題点や課題をまとめる。

(1) 絵本活用の効果

テキストやモデルとして使用することで、学生の理解に役立つ。あるいは、導入としての効果があり、具体的なイメージを持って授業に取り組める。（詳しくは、当日掲示する）

①色彩（混色・補色対比・配色などの説明）に関するテキストとして使用できる

「あおくんときいろちゃん」「こんにちはあかぎつね」「ごちやまぜカメレオン」「まっくろネリノ」

②遊び方や技法、造形素材の特徴の紹介として使用できる

「しんぶんしでつくろう」「やさいでべったん」「だんボールでつくろう」「クレヨンのかくろくん」

③絵本に出てくる登場人物を題材に使用できる（土粘土を利用した怪獣制作）

「かいじゅうたちのいるところ」

④絵本の場面を展開に合わせ全て利用できる（木片

を使ったパノラマ制作)

「ちいさいうち」

⑤絵本を授業内容の導入に使用できる(紙を利用した服・お弁制作)

「わたしのワンピース」「おべんとくん」

表『平成15年度 絵本を使った実践内容』

授業名	図画工作	チューター	言葉の指導法
開講時期	1年前期・後期	1年前期・後期	1年後期
対象人数	32~35名	10名	32~35名
記録(感想)提出の有無	期末に授業のまとめとして提出(評価対象)	無し	無し
授業内容との関連	導入や題材、教材として密接に関連する	授業ではないので、関連はない	絵本自体が授業に密接に関連する
1回の授業で読む絵本の数	原則として1冊	1冊(読まない場合もある)	0~5冊(授業によって異なる)
絵本からの発展	服・お弁当などの制作 土粘土や木片を使った制作の題材と	いじめ防止や人生観の啓発 絵本への興味や関心を持たず	ペーパーサートなどの表現媒体の制作 言葉遊び(しりとり・かるた・回文など)に発展 絵本の選び方・読み方
絵本の効果	色彩に関する説明技法や遊び方の説明 色や形、構成の美しさへの関心		イメージを共有化(共通化)できる
取り上げた主な絵本	「こんにはあかきつね」「あおくんときいろちゃん」「いじゅうたちのところ」「わたし」「わんわん」「ちいさいおうち」「くろくろく」「カラスのパンやさん」「どろんこおさる」「さつまのおうさぎ」「いも」「ねずみくん」「ちよっき」「どろりん」「おまうまそうだな」「もこもこ」	「スーホの白い馬」「さみしい」「さみしくない」「ともだち」「さっちゃん」「まほうのて」「ちのねこ」「きまぐれ」「ともだち」「ひきとりや」「しーむー」「とりかえん」「どろんこおさる」「さつまのおうさぎ」「かぶた」「エンとクラ」「ねずみくん」「ちよっき」「どろりん」「おまうまそうだな」「もこもこ」	「わにがわになる」「こぶたぬき」「おおきなさん」「そらぐん」「さんぽ」「11匹のねこ」「おつきさあ」「あんな」「おとんとむし」「とりとく」「三びきのこ」「エンとクラ」「かゆい」「だるまちゃん」「とんぐちゃん」「へんてこへんてこ」
授業の目的(備考)	保育者として必要な、基礎的な造形知識や技術を身に付ける 想像力や創造性を養う(4クラス)	学生生活指導や履修状況の確認、実習に関する指導など(授業ではない)	幼児の言葉の獲得についての理解 言葉に関する指導方法 2名の教員が担当(4クラス)

(2)問題点

①絵本本来の楽しさを伝えることよりも、絵本の効果を授業に繋げることが主目的に絵本を読むようになった。

②学生は、絵本を楽しむことよりも、絵本の内容や構成を記録するために、見るのが主になった。

③造形活動に繋がられる絵本には限りがあり、新しい絵本を紹介し難い。

④絵本を読んでもらったことのない学生が少なくない。

(3)課題・改善策

①新たな絵本の教材化の研究を進めていくと共に、絵本の選択の幅を広げられるような、授業内容に改善する。

②絵本を授業内容と直接的に結び付けるのではなく、色や形の美しさや構成の面白さなど、造形作品として取り上げる。

③絵本自体を楽しめるように、絵本の内容や構成の記録を求めない。ただし、必要に応じて授業全体の感想の中で絵本について触れさせる。

④絵本名や作者、出版社についてはプリントして配布する。

⑤授業後に学生が自分で手に取って読めるように、また、事前に学生が読めるように教室内に絵本を展示するスペースを設ける。

5. まとめと今後の課題

「図画工作」においては、改善すべき点はあるものの、絵本を授業に活かすようになってから、学生の授業に取り組む姿勢が、前向きになった。また、絵本に対して関心を示す学生も増えた。

絵本を保育者養成の授業で活かすことで、学生の学習意欲を引き出し、授業効果を高めることができると確信する。

幼児期に集中力、つまり、聞く(耳を傾けて聴く)力や見る(焦点を絞り、ピントを合わせて観る)力を養うことは、重要な課題である。そのためには、イメージが膨らみ、頭の中に絵が描かれ、それが動き出さなければならない。つまり映像化するための豊かな想像力が必要なのである。想像力は、多様な経験によって獲得されるものである。

絵本は、幼児にとって想像力を豊かにする大切な児童文化財である。同様に、保育者を目指す学生にとっても、欠くことのできないものである。知識や技術をいくら身に付けても、想像力(自らの想像力と子どもの想像力を理解する力)がなければ、保育者としてそれらを活かすことができない。また、それ以前に知識や技術を身に付けるためには、想像力が必要不可欠である。

学生が、1冊でも多くの絵本と出会う機会を作り、絵本の世界を楽しむことで、想像力を豊かにして欲しい。そのためにも、絵本を保育者養成に生かしていく方法を、幅広い観点から研究し、ひいては学生の保育力量を向上に繋げたい。